審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名　　辻　泰岳

本論は戦後期におけるわが国および国外の芸術運動とそれらが実際に展覧された「展示空間」に関する歴史的分析を試みたものである。日本の戦後建築史はいくつかの重要な先行研究があるものの、まだ論点的にも実証的にも掘り下げられておらず、未開拓な領野を広く残した分野である。本論はそうした研究状況のなかで「展示空間」という視角から日本の戦後建築史にひとつの見通しを与えようとしている。

研究にあたっての一次史料はすでに散逸したものも多いが、著者の精力的な資料収集によって分野横断的な資料が豊富に集められている。本論を下支えする分厚い資料群にはみるべきものがあると評価される。

本論は序章および結章に挟まれた３つの章から構成されている。それぞれの章は具体的な展覧会が慎重に選ばれ、戦後建築史を貫く鍵概念が各のケースから抽出されている。

第一章　丹下健三による「メキシコ美術」展（1955 年）の会場設計と壁画の設置について、では戦後の混乱期が一段落してようやく復興に向かうわが国において、従来あまり注目されなかった「メキシコ美術」展が取り上げられている。丹下はこの年に有名な「伝統論争」にもインボルブされており、このメキシコ美術展の会場設計や壁画の展示などに、丹下の伝統意識が投影されていたと論ずる章である。本展覧会は東京国立博物館でまず開催され、その後大阪市立美術館、倉敷の大原美術館などを巡回している。本論ではこの展覧会における展示物と展示方法などを細かく検討するなかで、建築家のみならずこの展覧会企画に関与した多くの美術家、それを実見した観客などを総体として捉えるなかで、戦後まもなく行われたこの展覧会に意識的に内在された「伝統」という鍵概念が浮き彫りにされる。

第二章　1950 年代の Good Design 展について : 浜口隆一の活動を通じての章は一転して浜口隆一の発言や論考、実際関与した展覧会などから、同じ 1950 年代をトレースしようとするものである。浜口はしばしば渡米しており、戦後アメリカの大衆文化のあり方や日常品のデザインなどにも大きな関心を抱いてい

た。本章はその後わが国で趨勢を占めることになる日用品のデザインという視角の源流を浜口隆一という人物を通して見事に浮き彫りにしている。

第三章「空間から環境へ」展（1966 年）についての章は、この展覧会に深く関与した二人の建築家磯崎新と原広司の視点から当該機の芸術運動のうねりの波頭をとらえようとしている。60 年代後半はわが国では高度経済成長という未曾有の経済発展が進んだ時代であり、その一方で大きく変貌を遂げる都市の姿があった。若き建築家たちはこうした都市の現代的変貌を敏感に肌で感じつつ、新たな芸術的視角として「環境」あるいは「エンバイラメント」という言葉に多重の意味を重ねつつあった。この空間から環境へという展覧会はまさに戦後のそうしたターニングポイントを象徴的に示すイヴェントであったことが、著者の精力的に収集した資料やインタビューによって明らかになった。

このように日本の戦後建築史は個別の建築作品あるいは建築家の活動だけでは見えにくい分野横断的な展覧会という場を設定することによって、別の見え方が可能になる。本論はまさにそうした新しい研究視角を大胆に採用しつつ、すでに多くが散逸されている展覧会関連資料を丁寧に拾い上げ、インタビュー資料なども駆使しながら組み立てたひとつの戦後建築史論である。展覧会という場が放つ問題機制にも細心の検討を加えつつ、ともかくも具体的な展覧会を通して戦後の芸術運動の史的展開を跡づけた、という点に本論の意義がある。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。